

〈書評〉

吉越昭久 著
『近世福山城下町の歴史災害』（文理閣、2020年）

佐藤英人

〈Book Review〉

YOSHIKOSHI Akihisa, *Historical Disaster of Fukuyama Castle
Town in the Early Modern Times, Kyoto: Bunrikaku, 2020*

SATOH Hideto

大自然の摂理を云々しても詮無きことであるが、近年、日本は度重なる大規模災害に見舞われ、「未曾有の事態」という言葉をよく耳にするようになった。大規模災害はもはや「未曾有」などではなく、いつ、どこで発生してもおかしくない状況に置かれている。

書評に際して、改めて過去10年間に発生した大規模災害を振り返ってみると、2011年の東日本大震災をはじめ、2014年の御嶽山噴火および平成26年豪雪災害、2016年の熊本地震災害、2018年の西日本豪雨災害および北海道胆振東部地震など、地震、噴火、豪雪、洪水と、実に多様な災害に遭遇していることに気づかされる。評者も2019年の令和元年房総半島台風の直撃を受けて、市内のゴルフ練習場が倒壊し、近隣の住宅が大きく損壊したことを鮮明に覚えている（未だ完全復旧の目途は立っていない）。身近に忍び寄る大規模災害から身を守るには、言うまでもなく、日頃から防災と減災を意識した用意周到な備えが不可欠であろう。

本書は広島県福山市の城下町を事例として、先人達が経験した過去の災害（歴史災害）を長年にわたる丹念な現地調査と史料に基づいて分析し、その成果を現代の防災・減災対策に結びつけようと企図された労作である。一見すると、本書は福山城下町のみを分析した事例研究に過ぎず、多様化する災害や汎用性の高い防災・減災対策まで論じ得ないのではないかと曲解する恐れがある。しかし、本書を精読する限り、そうした懸念は杞憂であることを予め断言しておきたい。

前置きが長くなったが、本書の紹介をしていこう。著者の専門分野は水文学・自然地理学であり、単に地域内の水収支を自然科学的にとらえるのではなく、「自然と人間とのかかわり」の中から複合的にとらえることを目指している。本書は序論と結論を含む8章立て226頁から構成さ

れる。分析の性質上、さまざまな図版や写真が用いられているが、それらの多くはカラー刷りとなっており、読者の視認性を高める工夫が随所にみられる。

まずⅠ章の「序論」では、本書を執筆した経緯が述べられ、これまで著者が取り組んできた研究の一端を垣間見ることができる。続くⅡ章の「研究対象の地域と期間」では、本書で扱う福山市の基本的な情勢、分析対象とするタイムスケールなどが手際よく説明されている。なるほど、著者の指摘通り、過去に発生した災害は数多あるが、それらの多くは史料として記録されておらず、被害の程度や復旧・復興に向けた取り組みを知るすべがない。ただし、近世以降、政治・経済の中心地となる城下町であれば、城下周辺で発生した災害に関する記録が残されている可能性が高く、そうした記録を分析に活かすことは、確かに理に適っている。

実質的な分析はⅢ章「歴史災害の概要と時間的・空間的变化」以降となる。この章では現存する複数の史料を用いて近世の「福山城下町災害史年表」を作成し、福山城が完成した1619年から1868年までの250年間にどのような災害が発生したのかを整理している。地震、火災、風雨、出水、洪水、干ばつ、その他で区分すると、各災害には発生期間や季節性、地域性などに特徴がある。当時も現代と同様、さまざまな災害に直面した事実を物語っている。

Ⅳ章の「城下町の建設とその後の変化」では、福山城の建設を巡る背景とともに、城下町の発達過程が明らかにされている。元来、備後国福山（常興寺山）は風水思想による四神相応の地（北に玄武（山）、南に朱雀（池・窪地）、東に青龍（川）、西に白虎（大道））であったとされる。城下町絵図などによれば、城下町内部の範囲や構造には大きな変化は見られないものの、城下町外部では水田開発を意図した干拓事業が展開され、築城時よりも人々の活動範囲が拡大している。

Ⅴ章の「環境条件から求めた被災域」では、具体的に水害（洪水、渇水、高潮）を例に、被災域の範囲を推定している。推定に用いられる環境条件を位置（地域）、地形、水域、防災施設、土地利用の5点に絞り、それぞれの環境条件下で水害による被害の程度を3段階で評価するものである。地理情報システム（GIS）の基本的な機能のひとつである重ね合わせ処理（オーバーレイ）で水害による被害を受けやすい地域を可視化する手法は、今般、各自治体で整備がすすむハザードマップ作成の一助になるだろう。

前章の結果を受けて、続くⅥ章の「防災・減災対策とその効果の評価」では、当時の防災・減災対策を詳しく解説した上で、対策毎の評価を試みている。福山城下町でおこなわれてきた対策には、河川の付け替え（流路の変更）や水路の新設、堤防・砂留工事などのハード面のほかに、水防令の制定と改正、義倉・社倉（平時に米を備蓄しておくこと）などのソフト面の対策があったという。ハード・ソフト両面の対策を比較した場合、前者は「被害抑止力」と「被害軽減力」の点で、後者は「被害実態把握力」と「復旧復興力」の点で高い効果が認められた。ただしその一方で、現代のような高度な観測システムが存在しない近世では、「予知・早期警報力」が最も立ち遅れていたという。現代の防災・減災対策では、「予知・早期警報力」が極めて重要であろう。センシング技術などの発達によって、我々は緊急地震速報を受信することができるようになった。

昨今における「予知・早期警報力」の目覚ましい進歩には、隔世の感を覚える次第である。

最後にⅦ章「歴史災害から抽出する防災・減災の知恵」では、これまでに得られた知見を踏まえて、時間経過とともに埋没しがちな歴史災害をいかに記録し、得られた教訓を今後の防災・減災対策に活かすべきかが論じられている。著者は史料や古地図の分析に加えて、地形や地質の状況などを組み合わせながら歴史災害を復原し、その結果から地域に即した防災・減災の「知恵」を抽出する重要性を説く。この観点からすれば、福山城下町における防災・減災の知恵は、堤防、遊水地、浚渫であり、これらが洪水防御に大きな役割を担ったと言えるだろう。無論、抽出された知恵は広く公開して活用しなければ意味を成さない。これまでも石碑や記念碑などを通じて、防災・減災の知恵が後世に伝えられてきた、知恵の継承は、「誰に」、「何を」、「どのように」、「誰が」伝えるのが肝要である。一例として、著者は社会教育や学校教育の現場で防災・減災の知恵を記した展示パネルや、石碑・記念碑に触れる機会を設けることを提案している。

本書を精読して痛感したことは、かつて地理学で論争になった環境可能論と環境決定論の相克である。建築・土木工学の飛躍的な進歩によって、傾斜地であっても盛り土や切り土がなされ、日当たりの良い住宅地が造成されている。氾濫原などの軟弱な地盤であっても、素人目には過去の地目が判別できないほど美しく整地されている。数年前までは住み手がいなかった場所が、次々と可住地域に組み込まれ、人間活動の領域は拡大し続けているのである。本書で取り上げられた福山城下町の干拓事業が、少なからず水害と結びついたことを忘れてはなるまい。やはり大自然の摂理を目の当たりにすると、人々の営みは無力なのかも知れない。

多発する災害による被害を受けて、「自然と人間とのかかわりの中から複合的にとらえる」防災・減災対策は、これまで以上にその意識が高まっている。たとえば、2019年には国土地理院発行の地形図に「自然災害伝承碑」の地図記号が表記されるようになった。同院が公開している地理院地図にアクセスすれば、地形図をウェブで閲覧できる上、浸水推定図などの災害情報を地形図に重ね合わせて表示できる。さらに、防災教育の強化も注目に値する。2022年より新学習指導要領の実施を受けて、高等学校の地理歴史科では「地理総合」が必修となる。この教科では「地図と地理情報システムの活用」、「国際理解と国際協力」、「防災と持続可能な社会の構築」がカリキュラムの軸に据えられ、ハザードマップの正しい読み方の涵養などが期待される。

本書が提唱している防災・減災対策の知恵の活用は、上述のように一部分で結実している。その背後には、地道に築き上げてきた著者の研究成果があると言っても過言ではない。決して表には出さぬ著者の労苦に最大限の敬意を払いながら、防災関係に携わる専門家や実務家はもちろん、学校教育の現場などで精読されることを強くお勧めしたい。

（さとう ひでと・高崎経済大学地域政策学部教授）

参考文献

- 国土地理院『地理院地図』<https://maps.gsi.go.jp/>（最終閲覧日：2020年11月4日）
吉越昭久編著（2001）『人間活動と環境変化』古今書院、289頁。
吉越昭久編著（2014）『災害の地理学（立命館大学人文学企画叢書）』文理閣、297頁。